



Vol.61

## 机の上の小さな変革

petit revolution on the desk



## 捉え直す技術

こんにちは、菅俊一です。今回は、「～として読む」ということについて、みなさんと考えていきたいと思えます。早速ですが、以下の文章を読んでみてください。

これまで積み重ねてきたことを、一度バラバラにして再構成していくことで、新しいものになっていく。

いかがですか？ この文章はかなり抽象度が高いので、一見すると何について書かれているかわからないかもしれません。しかし、自分自身の関心のある事象に結びつけて捉え直すことはできると思います。

たとえば、「アゲハチョウの成長」について書かれている文章として読んでみるとどうでしょう。文中の「一度バラバラにして再構成していく」という部分は、チョウが幼虫からサナギになり、羽化していくまでの成長の過程に言及しているように感じられませんか？

また、同じ文章を「アスリート」について書かれているものとして読むと、自らが培ってきた技術やフォームなどを再度見直し、改めて身体をつくり上げていく様子を描いているように読むことができますし、「研究者やアーティストの発想法」として読むと、日々の実践やインプットから、何か新しいものを生み出すための考え方

のように読めるかもしれません。

このように、同じ文章でも異なる視点や立場から読み直してみると、まったく違う解釈が生まれます。今回は抽象度が高い文章を用いましたが、まったく別の文章であっても「～として読む」方法を実践することは可能です。そして、この手法が最も活きるのが「本」なのです。

## 読み方次第で本は生まれ変わる

たとえば、ある生物のメカニズムについて書かれた本を、「人間社会の構造の話」として読むと、適材適所に最適化していくためのアプローチについて、新たな着想を得ることができます。

このように、これまでみなさんが人生のなかで読んできた本を、改めていまの自分の関心に引き付けて読み直してみると、当時は得られなかった視点を発見することができるはずです。

この、時代を超えて読み「直す」ことができる点こそ、本の最も優れた特徴ではないかと思います。

世の中には常に新しいものや情報を追い求める風潮がありますが、今回のような視点で捉え直すと、自分が生まれる前の本でさえ、新鮮なものとして読むことができます。本はそれ自体の価値以上に、読者それぞれの読み方次第で、初めて価値が生まれるものなのです。 ▲

## PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、『2355/0655』、『観察の練習』、『ヘンテコノミクス』など。